

～ただ「ありがとう」の心を伝えたくて～

郡山市音楽文化交流館 館長 佐藤 守廣



「わあ、今、私たち本当にロサンゼルスにいるんですね」

長い空の旅を終えてロサンゼルス空港に足を踏み入れた瞬間、団員の一人が思わず上げた歓喜の声を、私はずっと忘れることができません。

あの恐ろしい大震災発生後、真っ先に支援の手を差し伸べていただいたロサンゼルス市消防隊員の方々を始めとする多くのアメリカの人々に、被災地に住む日本人の一人として、感謝の思いをお伝えする時がついにやってきたのです。そして、そこから思いもかけぬ夢のような出会いの数々が、私たちを待っていてくれました。

月日が流れた今も、皆様からいただいた思い出のすべてがあまりにも素敵だったので、合唱団の子どもたちはもちろんのこと、私たちスタッフや随行したお母さんたちの間には、機会がある度、思い出話に花が咲くのです。

先日の合唱練習のとき、保護者の方からこう言葉をかけられました。「先生、うちの子がよく口にするんです」「また、ロサンゼルスに行って歌いたいなあ、大きくなったらアメリカに住んでみたいって・・・」

私はうれしくなって、こう言葉を返しました。「ぜひ、また行きましょう！そして、あのカリフォルニアの真っ青な空の下で思い切り歌って、たくさんの人々とふれあいましょう！」

このように、昨年のコンサートは、彼ら一人ひとりに計り知れぬほど大きな心の財産を

残してくれました。わずか8歳にして、何にも代え難いほどの貴重な経験を積んだ子どもは、きっと豊かな感性を持った大人に成長してくれると信じています。

ところで、ロサンゼルスの皆様にとって、子どもたちの歌声はどんな印象でしたでしょうか？彼らはまっすぐな心で、ただ一心に歌い続けました。

懐かしい唱歌からポップス、そして「アベ・マリア」や「アメイジング グレイス」まで、どんなジャンルの歌も、澄んだ声で誠実に歌いあげました。子どもたちの心には、招いていただいた皆様のご期待に、何としても応えたいという懸命な想いと強い願いがありました。

そんな心を聴衆の皆様にお伝えすることができたなら、私たちにとってこれ以上の喜びはありません。どのステージにおいても、歌い終わると同時に心のこもった拍手をいただき、子どもたちは、聴衆の皆様と感動を共有できた幸福感に満たされました。緊張に頬を紅潮させながらも、目を輝かせ、胸を張って生き活きと歌い続けていたことが、何よりの証です。合唱を通した心の交流は、本当に素晴らしいものでした。

この感動的な出来事の出発点は、すべて「ドンカラック男声合唱団」の訪米公演後に、郡山市をご訪問いただいた太田さんとの出会いからでした。

ドンカラック男声合唱団訪米公演のキーパーソンとなられた成田先生ご夫妻の紹介でお会いすることができ、4人で食事を共にしながら夢が膨らみました。「太田さん、今度は子どもたちの合唱で交流できたら素敵ですね」「それはいいですね。ぜひ実現させましょう！」もちろん成田先生ご夫妻も、即座にご賛同くださったことは言うまでもありません。

それから訪米までの限られた期間、太田さん、小川先生が窓口となられ、クリアしなければならない多くの問題を、献身的なご努力で次々と解決に導いていただき、ついに訪米コンサートが実現しました。

入国審査を無事に通過し、空港ロビーにたどり着いたとき、私たちの目に「FCT 郡山少年少女合唱団」の文字が飛び込んできました。本当にうれしかったです。そしてたちまち涙があふれました。

どうか不覚にも涙してしまった私をお許してください。太田さんと郡山で見た夢が、幾多の困難を乗り越え、まさに現実のものになった瞬間だったのですから・・・

また、右も左もわからぬ私たちを、小川先生ご夫妻をはじめ福島県人会の皆様や多くの関係者の皆様にあたたかく迎えていただき、感激でいっぱいでした。

その後、久山先生のご尽力で市庁舎でも歌わせていただく榮譽にも浴することができましたし、歓迎晩餐会、チャーチコンサート、白馬に引かれてのパレード、敬老ホームでのコンサートなどのほか、最終日には、本場のディズニールランドを満喫するというビッグプレゼントまでいただきました。

子どもたちにとってこれ以上ない満足感に浸ることのできた日々であったと思います。帰路に着く日、お世話くださった皆様に空港までお見送りいただく中、「ああ、楽しかったあ。もっとロサンゼルスに居たかったなあ・・・」と残念そうにつぶやいた子どもたち

の声が、演奏旅行の成功を証明してくれていたと思います。

帰国後も合唱団の活躍は続いています。日本各地からオファーをいただき、様々な場で歌っています。

子どもたちは、どんなにスケジュールがきつくても、ひとたびステージに立てば精一杯の歌声を響かせます。いつでもどこでも心をこめ、全力でひたむきに歌います。

南カリフォルニアの、あの日の青空の下で歌ったときと同じように、「ありがとう」の心を忘れずに・・・

